



敬愛

校長 稲葉 高広

〒183-0027 府中市本町4-16

☎ 042-361-9303

ホームページ <http://www.fuchu03c.fuchu-tokyo.ed.jp/>

「自他の敬愛」を行動で示す

校長 稲葉 高広

12月8日（月）の全校朝礼の講話を紹介いたします。（一部省略・編集）

「人権」というと難しいことに聞こえるかもしれませんが、端的に言うと、「お互いを大切にしましょう。」ということです。1948年12月10日、国際連合の第3回総会において、全ての人民と全ての国とが達成すべき共通の基準として、「世界人権宣言」が採択されました。この世界人権宣言は、基本的人権尊重の原則を定めたものであり、人権保障の目標や基準を初めて国際的にうたった画期的なものです。

日本では、法務省が毎年12月4日から12月10日の1週間を「人権週間」と定め、各関係機関や様々な団体と協力して、全国的に人権に関する啓発活動を行っています。

しかし、「いじめ」や「虐待」、性被害等の「こどもの人権問題」、性的マイノリティ等や外国人・アイヌの人々に対する「不当な差別」や「偏見」、「部落差別」（同和問題）、「ハンセン病問題」といった多様な人権問題が依然として存在しています。

特に最近は、インターネットを介した人権侵害が深刻化していて、命にかかわる問題にまで発展しています。

こうした問題の解決には、私たち一人一人が様々な人権問題を自分以外の「誰か」のことではなく、「自分のこと」として捉え、互いの人権を尊重し合うことの大切さについて認識を深めることが不可欠です。（参考：法務省ホームページ）

三中では道徳や学校行事などで学ぶ機会があります。

あらためて、みなさんの体や心は、みなさんそれぞれ自身のものです。肉体的に苦痛を感じるような行為だけではなく、くり返し傷つく言葉を言われる、机を蹴られるなどの精神的に苦痛を感じる行為は暴力に含まれます。暴力は、どんな理由があっても、誰であっても、決して許されるものではありません。また、SNSやメールで性的な言葉を送ったりするなど、性的な言葉や行動で人を傷つけることも「性暴力」と言って、どんな理由があっても、誰であっても、決して許されるものではありません。

先日は、全国中学生人権作文コンテスト東京都大会表彰式で、三中生が家族の時間から人権について深く考えたことを発表し、東京法務局長賞を受賞しました。府中市人権作文発表会でも三中生の代表が登壇し、とても感動的な発表を行いました。他人を大切にする思いや考え、実践的な態度はとても立派だと感じます。

私たち先生は全て、生徒のみなさんの心と体を大切に守りたいと思っています。

そのためにも、ぜひ一人で悩まないで、知らせてください。人権尊重の精神がある三中です。全校生徒が「自他の敬愛」を行動で示す三中生であることを信じています。

三中生が東京都で表彰！！

令和 7 年度全国中学生人権作文コンテスト東京都大会
【最優秀賞（東京都法務局長賞）】を受賞！！

「その人らしく」

2 年 E 組 川 上 和 奏

私が人権について考えるきっかけになったのは、今年の四月に亡くなった祖父との出来事です。祖父はとても優しく、いつも家族や身近な人を大切にする人でした。亡くなる前にも家族一人ひとりに手紙を書いてくれました。その手紙には感謝の言葉や励ましがつつられていて、読むたびに胸が温くなるものでした。

祖父が病気だと知った時、私はその場にいなかったもので、詳しい経緯はわかりません。ただ、病気は癌であり、治療をどうするか家族で何度も話し合っていたことを聞きました。抗癌剤を使うべきか、入院を続けるべきか。それとも、本人が望む形で残りの時間を過ごすのか。

そんな中、祖父は「最期は家に帰りたい」と言ったそうです。病院で治療を受ければ少しは長生きできる可能性があったかもしれませんが。それでも、祖父は病院ではなく、自分の家で、自分らしく過ごすことを選びました。

その希望を聞いたとき、家族は迷いもあったと思います。家に帰れば、病院ほどの医療設備はなく、介護や看病の負担も増えます。それでも、父と父の兄弟たちは、「お父さんがそうしたいなら」と言って、その願いを受け入れました。私はそのことをとてもすごいと思いました。なぜなら、病気の人の希望をかなえることは、簡単なようで、実はとても勇気のいることだと思うからです。

自宅療養が始まってから、祖父との時間は以前より穏やかになったように感じました。一緒にご飯を食べたり、部屋でゆっくり話をしたりしました。病院の白い壁や機械の音ではなく、慣れ親しんだ家の中で家族の声や笑い声に囲まれて過ごす日々。それは、祖父にとって何よりも安心できる時間だったのではないかと思います。

祖父が亡くなる十日前、祖父の希望で祖父が私達に向けて書いてくれた手紙を一人ひとりが読み上げる生前葬をしました。私が手紙を読む番になった時、私はその手紙を見て胸の奥がじんわりと温くなり、同時に涙がこみ上げました。その瞬間、これまでの祖父との思い出がよみがえり、「祖父は、私のことをこんなにちゃんと見ていてくれたんだな」と感じました。その手紙には「君の微笑みは素敵でこれからも大切にしてほしい」という言葉も書かれていました。祖父にそうしてもらえていたことが私は、何より嬉しかったです。これからも、この笑顔を大切にしていこう、そして、祖父に見せられるような笑顔でいたいと強く思いました。

私は会いに行くたびに、祖父が穏やかな笑顔を見せてくれることが嬉しかったです。病気でつらいはずなのに、「来てくれてありがとう」と言ってくれる姿を見て、私も自然と笑顔になりました。その姿は、まさに自分らしく生きるということだと私は思いました。

この出来事を通して、私は「人が生きていく上で欠かせないものは、単に『長く生きること』だけではない」と気づきました。その人が「どう生きたいか」、そして「どこで、誰と過ごしたいか」という希望を大切にすることが、人生を豊かにするのだと思いました。

人権という言葉辞書を引くと、「人が人らしく生きるための権利」と書かれています。その中には、「自己決定権」というものがあります。これは、自分の人生に関わる重要なことを自分で決める権利のことです。祖父が「最期は家で過ごしたい」と選んだのも、この自己決定権にあたります。そして、それを周りの家族が尊重したことは、人権を守る行動そのものだと感じました。

もし、家族が、祖父の気持ちを聞かずに病院での治療を続けていたら、祖父は不安や寂しさを抱えながら過ごしていたかもしれません。しかし、家族は祖父の声に耳を傾け、否定することなく受け入れました。その姿を見て、私は「人権を守ること」は、特別なことはなく、身近な人の気持ちを大切にすることから始まるのだと知りました。

祖父との別れはとても悲しかったです。でも、あのとき家族が願いを尊重したことで、祖父は幸せな時間を過ごせたと思っています。そして、その経験は私にとって、一生忘れられない大切な学びになりました。これから私は、人と接するとき、その人の気持ちや希望をできるだけ尊重したいと思います。それは友達や家族だけでなく、学校や将来の仕事でも同じです。相手の立場や考えを理解しようとするのが、相手の人権を守ることにもつながると思ったからです。

祖父が教えてくれた「自分らしく生きることの大切さ」。その思いを胸に、私はこれからも周りの人と向き合っていきたいと思っています。

川上さんは、12月13日（土）に羽田空港第2ターミナル5Fフライトデッキトキヨーで行われた授賞式において表彰されたあと、この作文を堂々と読んで披露しました。

右の写真は、その時の様子です。



また、この人権作文コンテスト東京都大会では、もう一人、2年B組の

西田 樹央さんが、「自分らしく生きる」で【作文委員会賞】を受賞されました。

12月7日（日）に生涯学習センターで行われた「第28回府中市小・中学生の人権作文発表会」では、「優秀賞」に輝き、以下の作文を堂々と読んで披露しました。

左の写真は、その時の様子です。



「自分らしく生きる」

2年B組 西田 樹央

秋田に住んでいたおじいちゃんがぼくの家に来ることになりました。おじいちゃんは、「膀胱がん」という病気にかかってしまい、東京での大きな手術が必要になったのです。

おじいちゃんは将棋が好きで、特に、藤井聡太さんの対局は必ず見ていました。新聞やテレビで藤井聡太さんの名前を見つけると、「今日の対局楽しみだなあ」と目をキラキラさせていたのを覚えています。

そしてもう一つの楽しみは、地元の温泉に入ることでした。冬の寒い日でも車を走らせて、毎日温泉に入りに行っていました。

しかし、手術の後、おじいちゃんの生活は大きく変わってしまいました。がんの手術で膀胱を取り除いたため、「ストマ」と呼ばれる人工の排尿口をお腹につけることになったのです。袋を使って排尿する生活は、とても大変で、ストマの手入れや交換もしなければなりません。おじいちゃんは、「これじゃ

もう温泉には入れねえな」とさみしそうな顔をしていました。そして、「早く元気になって秋田に帰りたい」と何度も言っていました。

今までの生活ができなかったことは、おじいちゃんにとっても、つらかったのだと思います。

そんなおじいちゃんのと生活がはじまり、ちょうど一年が経ちました。その一年間、母は毎日おじいちゃんの介護をしていました。ストマの管理や食事の準備、病院への付きそいなど、母は朝から晩まで毎日忙しく動いていました。とても大変そうに見えましたが、それを感じさせないくらい母はおじいちゃんに明るく声をかけていました。ぼくはその姿を見て、「介護ってただ世話をすることじゃないんだよな」と思いました。相手の気持ちに寄りそうこと、できないことを助けてあげること、そしてその人らしく生きられるように支えることが本当の介護なんだと理解しました。

おじいちゃんは、自分の病気やストマのことで弱気になることもありました。でも、どんなときでもぼくのことを気にかけてくれました。「学校はどうだ？」といつも声をかけてくれて、ぼくはその時間がすごく好きでした。

そんなある日、おじいちゃんが母にこんなことを話していたそうです。「もっと早く健康診断を受けていれば、こんなに悪くならなかったかもしれないな」と、その話を母から聞いた時、ぼくの胸にずしんと重たいものがのしかかったような気がしました。

健康診断は、病気を早くを見つけるためのものです。しかし、おじいちゃんは体の変化に気づきながらも病院に行かなかったのです。その結果、病気が見つかったときにはもう進行していて、手術も大変なものになっていました。

ぼくは、おじいちゃんの話をして、健康診断の大切さをはじめて知りました。「自分は大丈夫」と思っている、体の中では病気が進んでいることがあるかもしれない。だから、ちゃんと検査を受けることは自分の命を守るためにとても大切なことなんだと思います。

おじいちゃんはストマをつけながらも、自分らしく生きようとしていました。将棋の番組を見たり、散歩をしたり、買ってきたマンガや新聞を見たりして、笑顔を見せてくれました。病気になってもその人らしく生きることが大切なのだと教えてくれました。人はみんな「自分らしく生きる権利」を持っていて、それを「人権」と言います。人権は、特別な人のためのものではありません。病気の人も、お年寄りも、体が不自由な人も、みんな同じようにもっているものです。そして、それを守るためには家族やまわりの人の思いやりが必要なのだとぼくはおじいちゃんと母の姿を見て感じました。

おじいちゃんが亡くなってからもうすぐ二ヶ月が経ちます。今でもおじいちゃんのいた部屋は、時間が止まったように静かでした。どこからか「樹央」と呼ばれているような気がします。

ぼくは、この一年間で多くのことを学びました。命の大切さ、健康診断の必要性、人としての尊厳、そして、思いやりの心です。これからは、ぼくも人の痛みや気持ちに気づける人になりたい。そして、自分の体も大事にしながら、誰かの力になれる人になりたいと思います。

令和7年度 第28回府中市小・中学生の人権作文発表会（「優秀賞」以外の受賞者紹介）

「優良賞」	2年	榎本	杏菜	（敬称略）
「優良賞」	2年	深井	隆乃介	
「優良賞」	2年	惣ト	結良	
「優良賞」	2年	広田	優衣	
「優良賞」	2年	高橋	七美	
「優良賞」	2年	川上	和奏	



三中学生会頑張ってます！！

第85回 中学生生徒会リーダー研修会

12月13日（土）、府中第二中学校の会場で、「思いを重ねて動き出す～つながる つくる かえる～」というテーマで市内中学校の生徒会活動を発表し合いました。

その後の分科会では、他校の生徒と交流会を行い、活発に意見交換をしました。



三中学生が一日税務署長！！

令和7年度 中学生の『税についての作文』にて
【武蔵府中税務署長賞】を受賞！！

中学生の『税についての作文』にて、3年C組の北橋 由梨さんが、「税の持つ力」で【武蔵府中税務署長賞】を受賞されました。

12月10日（木）に、府中市役所で行われた表彰式で表彰されました。

また、12月12日（金）午後には、武蔵府中税務署で、一日税務署長を委嘱され務めました。

右の写真は、その時の様子です。



「税の持つ力」

3年C組 北橋 由梨

家に帰ると郵便受けに一通の封筒が届いていた。送付元は市役所のような。一体これは何の封筒なのか。父に聞くと、それは住民税の支払いの通達だった。住民税とは、その地域に住む個人に課する地方税をいうらしい。調べてみると、他にも所得税や消費税などたくさんの種類の税金がある。これらの税金を私たちは払わされているのか。そう思うと、税金に対して不平等感や不満が募った。なぜ、私たちがこれだけの税金を納める必要があるのか。尋ねると母は、

「私たちが払っている税金が、私たちの生活を支えているんだよ。あと、おじいちゃんのことも。」と答えた。

私には和歌山県に住む祖父がいる。祖母の死後、一軒家で一人暮らしをしていたが、昨年から地元の介護施設に入所していた。遠い土地に住む祖父の生活を一体どう税金が支えているというのか。私が疑問に思っていたとき、国税庁のホームページに「身近な税の使いみち」という一つの記事を見つけた。

そこには、老後も安心して暮らしていくための年金や、介護サービスを利用したときのかかるお金の一部には税金が使われている、ということが書かれてあった。

「もし介護施設がなかったら、介護のために私たちがおじいちゃんのところ引っ越すことになったはず。そうしたら、今の仕事も続けられなくなっていたと思う。」

母の言葉を聞いたとき、私の頭の中で一つの循環が浮かんできた。

私の両親が毎日働いて、その収入の一部が税金として支払われる。集められた税金は、私たちが暮らす上での様々な保障や、遠くに住む祖父の年金、介護にかかるお金として使われる。それにより両親は安心して働き、また税金を納めることができる。このような循環が、祖父や日々の私たちの生活を支えているのだと、その時初めて実感したのだ。

改めて自分の周りを見回してみると、確かに授業で使う教科書や机、道の白線やガードレール、これらすべてが税金によるものだ。

今までは税金と聞くと、具体的にどのように使われているのか実感が持てず、取られてばかりという印象があった。しかし今は、税金が私たちの生活のために使われていること、国と私たち双方に利益のあるものなのだと実感している。

私の家には定期的に、祖父のいる施設から近況を綴った手紙が届く。手紙に同封された写真には、満面の笑みを浮かべる祖父が写っていた。

税には力がある。人々を守り、笑顔にできる力が。その力は一人で作れるものではない。社会の一員として、その力になれる存在になりたい。



みなさま
よいお年を
お迎えください
3学期にまた
元気に会いましょう

